ミリアム

南野蜜柑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ミリアム

【Ｎコード】
Ｎ１３７０Ｌ

【作者名】
南野蜜柑

【あらすじ】
古代ユダヤの少女、ミリアムの物語。彼女にとって生とは？
ミリアムがすごい人間不信なので、気を悪くする方がいらっしゃるかもしれません。初めに謝っておきます。

終末の始まり

ユダヤでは、ラビの血筋は尊ばれた。
ラビの子供たちは年頃になると、神殿に行く。男子は、ラビになるために学ぶ。女子はラビの子供を産む。そして、その産まれた子供が年頃になり、神殿へと向かう。
こうして、ラビの血筋は守られるのだ。

ミリアムは１５歳。去年、神殿に来た。
母であるミリアム（ユダヤではミリアムという名前は多い）も自分と同じ年頃のとき、ここに来て、自分を身籠った。
やがて、自分も身籠るのだろう。上の人が決めた相手と。
ミリアムには不思議だった。
（人間はどうして子供を産むのか？
ただ、ただ、自分の遺伝子を残したいだけ。そんなに自分の遺伝子に自信があるのだろうか？凡才しか持たない人間を増やして何の意味がある？）
ミリアムのこの、卑屈とも言うべき考え方は幼少のころに始まった。
ミリアムの母はラビの血筋を引く。だから、ラビの子供を身籠ることができた。
しかし、神殿は神聖な場所。そこで血を伴う出産をすることは許されなかった。となれば、外で産むしかない。だが、父親であるラビは祭司なのだから、外には出れない。それで、ラビの子供を宿した

女性はお腹の子供と血の繋がっていない男性と結婚することが習わしとなっていた。何故、この、無駄とも言うべき習わしが始まったのか。誰も納得する答えを持たない。えてして、習わしとはそういうもの。それはさておき、神殿の力を背景に結婚した男女が普通の夫婦のように仲良くなれるはずがない。ましてや、お腹に自分とは違う遺伝子を持った子供を入れている女など、誰が結婚しようと想おうか。

それが、独占欲の強い男性の本音であろう。ミリアムは尊い血筋を持ちながら、父親に愛されることはなかった。

罵声を自分に浴びせる一方で父親は弟妹には優しかった。

自分の遺伝子が入った入れ物を男は望むのだ、とそうミリアムは思った。

けど、本当にそう思っているのは、男だけだろうか。周りの女性を見回す。

ミリアムには、自分と自分が愛する（と思い込んでいるだけかもしれない）男性との間に産まれたエゴをかわいがっているようにしか、見えなかった。

花が散る

ミリアムは百合の花を集めていた。自分への慰めに。
昨日、ラビたちに呼ばれた。自分の相手が決まったのだ。
そして今日。その相手が自分の部屋に来る。

周りの女性は祝福してくれた。しかし、妊娠、出産が喜ばしいものだと誰が決めたのか。

人類という仲間が増えるから？
他のメス、もしくはオスとの闘いに勝ったから？
子供を育てることで自分も成長するから？

そんな綺麗事で子供が産まれるのならば、何故虐待する親がいるのだろう。自分勝手だ。しかし、自分勝手でなければ、人として生きていくことはできない。
だから、妊娠出産は親のエゴによって成り立つのだろう。ミリアムの場合は、次世代にラビの血筋を引き継ぐというエゴのために。

エゴから産まれた子供は幸せに暮らせるのだろうか。

夜。ラビが部屋を訪れた。名前をガブリエルというらしい。

「私は産まれたときに予言を受けてね。私の子供はメシアになるらしい。光栄に思いなさい」

そう言って、ガブリエルは寝室へと入っていった。
ミリアムは今日、摘んだ百合の花を花瓶に飾った。
そして、そっと溜め息をついてミリアムも寝室へと入った。

朝になり、ミリアムは寝室を出た。花瓶に飾っていた百合の花はどこからか入ってきた野良猫に踏みにじられていた。

終末の終わり

人というものは周りに、そして時代に押しながされるもの。
誰もそれには逆らえない。人間はちっぽけだから。

ミリアムは周りの期待通りに、本人にとっては期待外れなことに妊娠した。
お腹の子供の父親であるガブリエルは毎日のようにミリアムの部屋を訪れた。

「ミリアム。君の結婚相手だけれども、ようやく決まったよ」

私が結婚するのは、大工らしい。今はおちぶれてしまったが、王族の末裔ということだった。

「この子は救世主になるんだ。大事にするんだよ」

親はいつも過度の期待を子供に課す。自分が歩めなかった人生を子供に歩ますために。
子供は親の操り人形となる。
そして、その操り人形は大きくなると糸を切ってまた、操り人形を作りだす。
時代を重ねるごとに期待だけがふくらんでいく。

その後、私はその大工のもとに嫁ぎ、住民登録のため、ガリラヤに向かった。
その道すがら、私は産気づいたのだった。

「すみません。子供が産まれるんです。どうか、宿を・・・」

宿はどこもいっぱいだった。
出産となると、宿屋の主人にとっては迷惑な話だ。手伝わなければならない。
しかし一方で、主人たちは出産を他人に勧めるのだろう。
本当に勝手だ。

「私も他人のことを言えないけれど」

あんなに子供を産むのに、疑問を抱いていたのに結局は周りに流された。
自分も周りの人間もその卑怯さは変わらない。

「ミリアム！ここの主人が馬小屋を貸してくださるそうだ！」

深夜。産まれたのは、男の子だった。残念ながら、ガブリエルが言うような救世主になれそうにない。
こんな小さい生き物が世の中を救えるはずがない。
ミリアムはそっと子供を抱き上げた。

「おや、誰か来るぞ」

夫は人の影を認めて小屋から出ていく。

「私のような人間にならないで」

またひとつ、希望が増やされた。
ミリアムは馬小屋の窓から空を見る。夜空にひときわ光を放つ星を見つけた。

「星が綺麗ねぇ。

イエス」

ミリアム、日本ではマリアと呼ばれるこの女性は後に聖母と賛美されることになる。
彼女の息子は長じて後、時代に逆らって処刑された。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1370l/

ミリアム

2010年10月13日04時09分発行